

平成 30 年の時を経て：佐渡相川病院における一人外科医を回想する

小林英司

慶應義塾大学医学部 臓器再生医学寄附講座

はじめに

地域病院の役割は、その地域における患者の要求とその医療施設に勤務する医師によって変わるであろう。若い外科医にとって、手術症例を経験し続けることは極めて重要なキャリアーであることは時代が変わっても変わることのない事実である。外科医として7年目に勤務した佐渡町立相川病院（旧名）での外科症例は、30年もの時を経て鮮明に思い出される。同病院は、佐渡市の西部に位置する離島のへき地病院である。周辺は佐渡金山をはじめ古い歴史と文化のある観光地で、病院からは素晴らしい夕日が眺められる（図1AとB）。昭和28年3月1日鉾山病院として開院し、平成16年3月1日より現、佐渡市立相川病院として療養病床52床（うち介護病床19床）が運営されている（1）

昭和61年4月から同病院への派遣医局である新潟大学第一外科から一人医長として7年目の医師が2か月交代で地域医療に当たっていた。2か月交代での人事であり、全身麻酔による手術を他病院へ紹介する体制を取っていたが、著者は自治医科大学卒の地域医療従事の任務もあり1年間を通じて同病院に務めることとなった。「自分でしっかり手術ができるような症例はやっていい」「全麻の時は医局から応援を出す」の同門第一外科からの声援を受けて、2年間止まっていた全身麻酔手術を開始したのが、平成の始まる時であった（図1CとD）。いま平成の年号が終了するに当たり、地域医療に当たる一若き外科医が勉強させてもらった患者、家族そして外科医を支えてくれた病院関係者に感謝し、30年の時を経てその手術症例をまとめてみた。



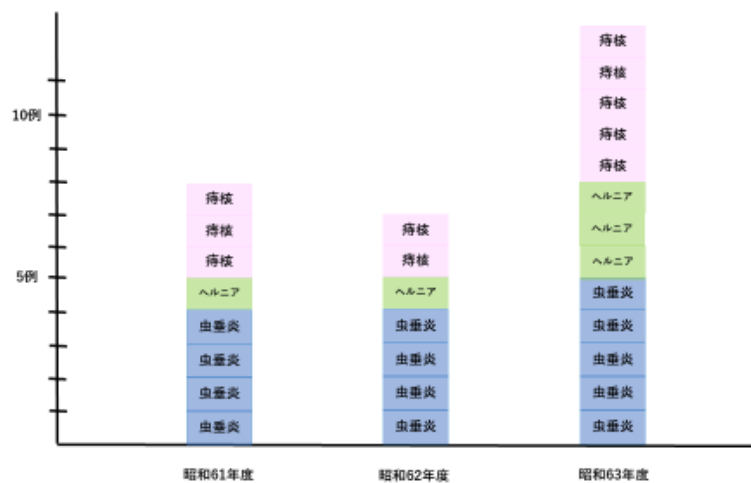
A：病院近くの外海府の夕日 B：往診の帰り道。運転手の有田さん
C：夏祭り参加の踊りの練習 C：メス納め

近年、外科医不足が深刻な問題となり、地域の最前線病院では、リスクの高い医療行為自体からの撤退が相次いでいる。しかし、若き外科医にとり、自分の与えられた環境下で、患者やその家族の力になるために全力を尽くせることは、かけがえのない経験であるものと信じている。

2 か月派遣による場合との腰椎麻酔症例数の変化

外科医一人で対応した手術として当時、腰椎麻酔手術がある。疾患は、急性虫垂炎、ヘルニア、さらに痔核手術であった。本地域における外科医への経年の要求度が大きく変化しているわけではないことを、著者が派遣される前の2年間と比較した（図2）。

佐渡町立相川病院外科での腰椎手術症例の変遷



急性虫垂炎症例は、昭和61年度、62年度、63年度ではそれぞれ4、4、5例で計13例（男：女=9：4）あった。年齢は10-67歳（平均±SD=28.5±18.4）であった。

ヘルニア症例は、昭和61年度、62年度、63年度ではそれぞれ1、1、3例で計5例（男：女=5：0、平均年齢±SD=56.8±28.2）あった。昭和62年度の症例のみが、2歳児であるが、他は全例高齢者の鼠経ヘルニアであった。腰椎麻酔下でBassini法にて手術された。

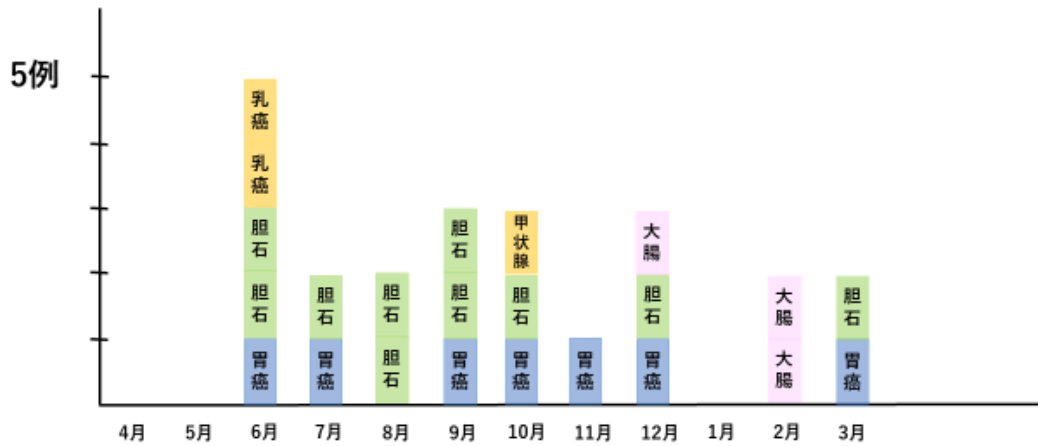
痔核症例は、昭和61年度、62年度、63年度ではそれぞれ3、2、5例で計10例（男：女=9：1）あった。年齢は、18-71歳（平均±SD=51.7±18.1）であった。本症例も腰椎麻酔下で外科医は一人に対応している。

急性疾患である急性虫垂炎への対応数は大きく変化がない。一方でヘルニアや痔核など待機手術が可能な症例は、常勤医がその勤務期間が長ければ、他の遠方の医療機関での手術を受けないで済む可能性を示していた。

昭和63年4月からの全身麻酔再開後の症例数

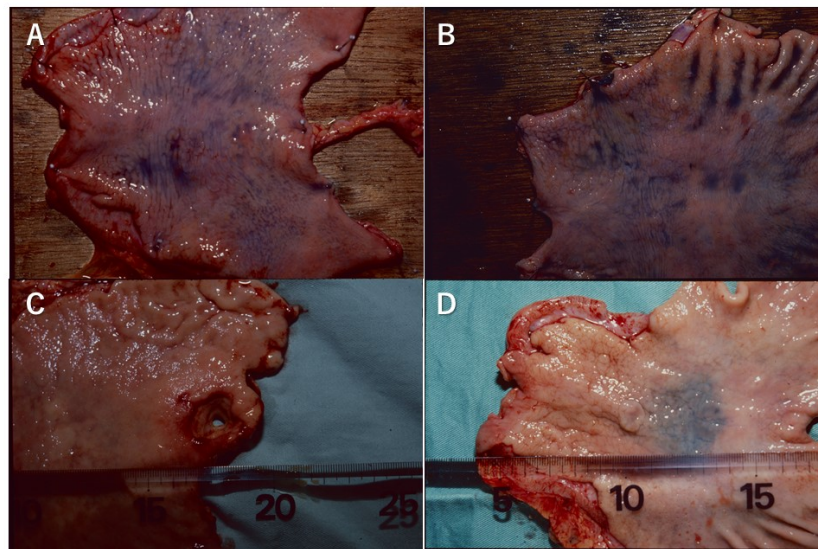
図3に月別、症例別に全身麻酔症例まとめた。

昭和63年度 佐渡町立相川病院外科での全麻手術症例



2 か月間の準備期間をおいて内科が発見した癌腫を中心に全身麻酔手術を開始した。

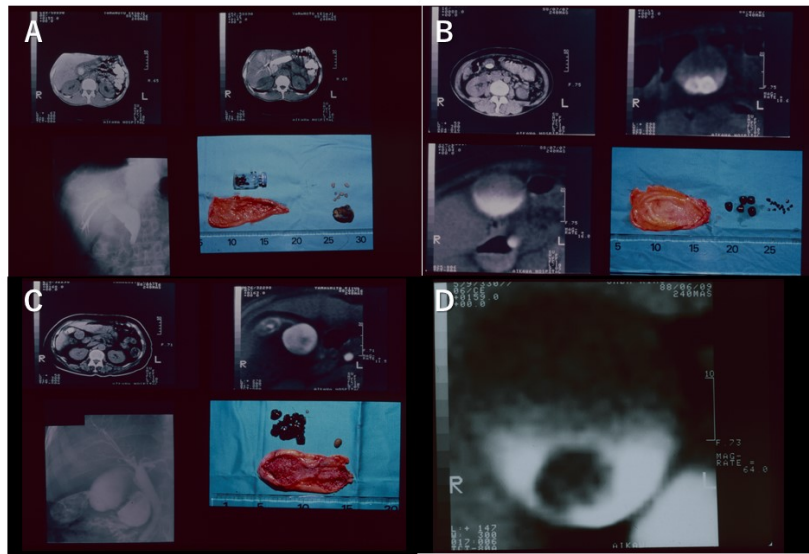
胃がん症例による胃切症例は7例(男性:女性=3:4)で全例幽門側部分切除であった。年齢は53-78歳(平均±SD=68.1±9.6)であった。中には、胃潰瘍穿孔にて緊急手術を行ったが、潰瘍周辺にIIcの分化型癌が病理で判明した症例があった(図4C)。



A: 78歳、男 B: 78歳、女 C: 53歳、男 D: 73歳、女

さらに昭和63年8月に35歳の男性、平成1年1月に32歳の男性がそれぞれ十二指腸潰瘍穿孔で夜間緊急来院し関連病院に搬送して、著者も搬送病院で夜間手術を行った。

胆石症例は、10例(男性:女性=4:6)で内9例が胆のう炎の既往症があり、一時的に抗菌薬治療で緩解した症例での胆嚢摘除であった。年齢は52-78歳(平均±SD=69.6±6.9)であった。診断は、内科にてCT、ERCPが9例に行われ、十分炎症の沈静化した時に手術となっていた(図5)。



A:64 歳、男 B:76 歳、女 C:71 歳、女 D:73 歳、女

大腸がん症例は、3 例（男性：女性=0：3）、年齢は 53-87 歳（平均±SD=71.7±14.1）で全例進行がんであった。

乳がん・甲状腺がん症例は、3 例（男性：女性=0：3）で、年齢は 41-85 歳（平均±SD=59.7±18.6）であった。

終わりに

地域病院では、その土地にあった症例を経験する。高齢者化が進み独居でいながら寝たきり状態の患者にも遭遇した（図 6 A, B）。



A：一人暮らしの糖尿病患者の壊疽 B：寝たきり高齢者の褥瘡
C：ERCP を行う吉田英春先生 D：医局の応援を受けて手術する著者

専門外でも自分にできることはないかを患者、その家族と共に考える。経験した症例を大切に、稀と思われる経験症例を発表し、症例報告を学術誌に書く(2-4)。地域病院では、今の大学病院で十分教育できない場が目の前にある。そして、若い医師にとり地域医療での経験は、医師としての責任と期待に応えようとする医師としての喜び、そして将来の医学に挑むための素地作りであることを伝えたい。

現在、同病院は療養型病院として外科手術は行なっていないが、現在の佐渡全体の医療資源にあった形で地域医療に貢献している。地域病院は、広域性をもった考え方の中で、医療資源にあった形で変貌していくことも必修であった。

謝辞

地域病院で外科医が活躍できる場を提供していただけたのは勤務を共にした内科医長、吉田英春先生(自治医科大学 3期卒業。現、吉田内科医院 院長)(図 6C)のおかげである。あらためてここに感謝申し上げます。また、本稿を推敲いただいた現相川病院 院長吉井章先生に感謝申し上げます。

文献

1. 佐渡市立病院(両津病院・相川病院)の概要[佐渡市ホームページ]
https://www.city.sado.niigata.jp/info/data/2009/0826_22...
2. 小林英司:観光地における救急医療の諸問題—佐渡郡相川町における島外救急患者—
(自治医大卒業生からの現地レポート(64)) 都道府県展望 4:62, 1989
3. 小林英司、渡辺和夫:離島に於る外科手術症例の検討—佐渡郡町立相川病院外科に於ける報告. 地域医学 4(5): 18-22, 1990.
4. 小林英司、後藤俊夫、吉田英春:胃アキズ症の検討—佐渡郡相川町立相川病院に於る報告. 月刊地域医学 4(6): 5, 39-544, 1990.